

【MACF礼拝説教要旨】

2022年2月20日

「安息日の主」

ルカによる福音書6章

6:1 ある安息日に、イエスが麦畑を通って行かれると、弟子たちは麦の穂を摘み、手でもんで食べた。

6:2 ファリサイ派のある人々が、「なぜ、安息日にははならないことを、あなたたちはするのか」と言った。

6:3 イエスはお答えになった。「ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか、読んだことがないのか。

6:4 神の家に入り、ただ祭司のほかにはだれも食べてはならない供えのパンを取って食べ、供の者たちにも与えたではないか。」

6:5 そして、彼らに言われた。「人の子は安息日の主である。」

6:6 また、ほかの安息日に、イエスは会堂に入って教えておられた。そこに一人の人がいて、その右手が萎えていた。

6:7 律法学者たちやファリサイ派の人々は、訴える口実を見つけようとして、イエスが安息日に病気をいやされるかどうか、注目していた。

6:8 イエスは彼らの考えを見抜いて、手の萎えた人に、「立って、真ん中に出なさい」と言われた。その人は身を起こして立った。

6:9 そこで、イエスは言われた。「あなたたちに尋ねたい。安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか。」

6:10 そして、彼ら一同を見回して、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われ

た。言われたようにすると、手は元どおりになった。

6:11 ところが、彼らは怒り狂って、イエスを何とかしようとして話し合った。

「安息日」は神が天と地を6日で創造され次の日の働きを休まれたことから提示されている重要な「神の安息の日」が起源です。

神が仕事を休まれたのは、被造物に安息をもたらすため、自らの創造のわざをおだやかに祝福するためでした。神さまは決して働きすぎて疲れ果てて休んだわけではありません。

歴史の中で宗教集団の教えがだんだん固まり、人間もそれにならって、働きを休み、神との安息を楽しむようにというはずだった安息日が、いつの間にか「休むのだから、やってはいけないこと」のルールが何百も加えられてしまいました。どこかで「神への礼拝と感謝による安息」という視点から「人間が仕事などを休み、なにもしてはいけない日」という感じに変わってしまっていました。そしてその禁止事項を守ることが安息日を守ることとして評価されるようになってしまったのです。

そうすることで救われるのだというような考え方が入り込んできたのです。

麦の穂を摘むことも、病人を癒やして歩かせたり、お布団を運んだりすることも禁止事例に当たりました。

そんな背景の中での出来事が2例。

1) 弟子たちの麦の穂摘み

当時、弟子たちもイエス様も、それこそ

お休み無しで働き続けていました。
大勢の病人に囲まれ、落ち着いて休む場所ももたず、あちこち移動しながら病人への対応に

追われていたのです。ですから、弟子たちの空腹感は普通じゃなかったと思います。

荒々しく、麦をむしり取って食べていたという感じだったと思います。

それに対して厳格な宗教人であるファリサイ派の人たちがクレームを付けたのです。

「なぜ、安息日にはしてはならないことを、あなたたちはするのか」

イエス様は旧約聖書に出てくるダビデのことを引用して話を進めています。

サムエル記上21章1～9節に出てくる場面が引用場面です。ここではノブの祭司アヒメレクが、祭司以外が触れることの赦されない「聖別されたパン」をダビデに与えました。

それはダビデには神さまからの王としての委託があり、権威があったからです。それは本来であれば律法違反だったのですが、ダビデには赦されており、また他の人達も

それに異論を唱えはしませんでした。

そして、イエス様は宣言します。「人の子は安息日の主である。」

人の子という呼び名はイエス様がご自分を指す時、好んで使われた呼び方でした。

つまり、イエス様は「わたしこそが安息日を制定し、人々の安息をもたらす主」なのだと言っているのです。

この状況では弟子たちが、神の国の福音宣教で疲れ果て、食べ物を摂取しなければ倒れてしまうほどだったのだと思いま

す。それを規定があるからと禁止するのは「殺すことと同じ」になります。

イエス様は弟子たちが穂を摘んで食べることを赦し、まさに、自らは安息をもたらすために来た主であり、安息、いのち、平安はわたしの思い一つで提供できるものだと言ったのです。

私たちがどんな状況にいても「安息日の主」が共におられるなら、かならず心の深いところに「安息・平安・よろこび」が届きます。人はそれをほんとうの意味で、止めることはできません。

さらに話が展開していきます

2) 安息日の意味

次に別の安息日に会堂で起こったことが記録されています。

それは右手が萎えている人の癒やしの出来事です。

安息日の禁止事例の中には癒やすという医療作業も、歩く歩数さえも制限され含まれていました。

律法学者やファリサイ派の人たちはイエス様が何をなさるかみていました。それは律法による安息日規定違反で訴える口実を得るためでした。

そういう中でイエス様は彼らに本質的な質問を投げかけています。

6:9 そこで、イエスは言われた。「あなたたちに尋ねたい。安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか。」

宗教指導者たちは、答えていません。そ

んな事考えていないからです。彼らは「守るか、守らないか」ということしか考えていなかったのです。そもそもなんのための安息日なのかということさえ深くは考えなかったように思います。善が実行され、いのちが救われ、そこに「安息が訪れる」つまり、安息日の本質的な意義と喜びを味わえるのだとイエス様はおしえているのです。そこで癒やしが実行されます。「安息日の主」である方みずからが、右手の萎えた人に安息をもたらしたのです。しかし、宗教指導者たちの反応は、どうだったでしょう。

6:11 ところが、彼らは怒り狂って、イエスを何とかしようと話し合った。とあります。彼らの心には「神への愛」より「自分たちの組織を守ること」のほうが重要だったのです。「人のいのちの解放と自由」よりも「束縛するだけの規則を守れるかどうか」ということのほうが重要事項だったのです。そこでイエスを殺そうとさえ考えているのです。自分たちの価値観を同じくできない人を排除しようとしてしまうことはとても危険です。更に考えてみれば、律法遵守しないのなら、そういう人は死んでも良いのだと決めつけ、それに違和感を感じなくなっている心の鈍感さに気をつけなければなりません。

イエス様の弟子たちは、あそこで麦の穂を食べなければ、死にそうなくらい空腹だったと思います。それをイエス様が赦しておられるわけですから、禁止事例だけにこだわるのは間違いです。また会堂で癒やされた人にとっても、どんなに彼が望んでいたことでしょう。

弟子たちには「お腹が空いていては仕事はできませんよね。食べるものが見つかって良かったですね」とか、癒やされた人には「おめでとうございます。不自由さから解放されてよかったですね」が私たちからの言葉であってほしいと思います。

キリストはそういう束縛を解除し、安息の主として、私たちの心に平安と喜びと解放とを経験させてくださいます。まさに神の国の福音をもたらしてくださるのです。私たちへの安息、私たちの安息を常に大切に考え、提供しようと安息の主は今日もあなたのために働いています。

MACF礼拝映像はこちらです。
<https://youtu.be/ATTcxvQiCOQ>